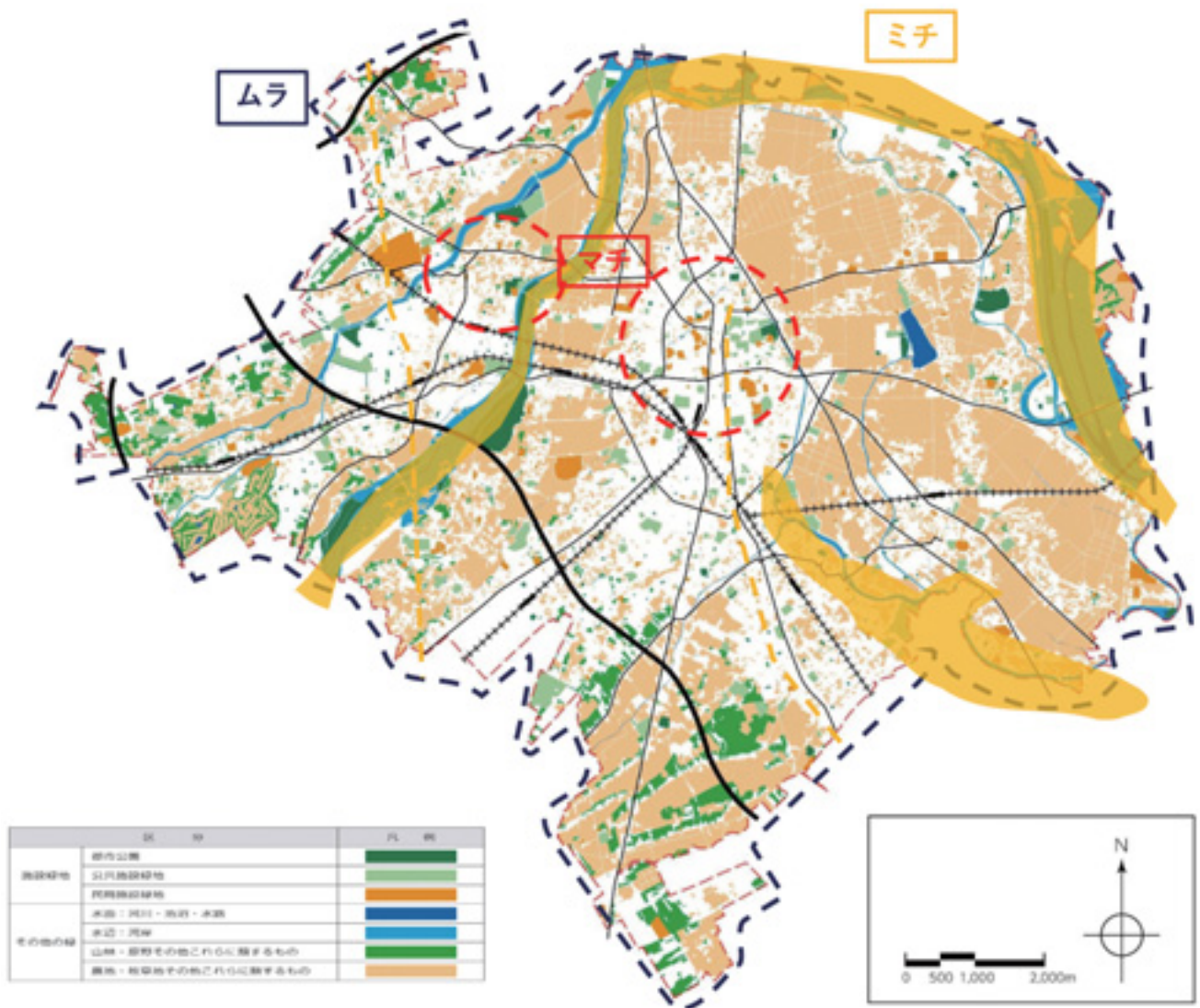


第3章 川越市の歴史文化の特徴

本市は、高い山もなく海もなく、概ね平坦な台地と低地からなるという自然条件に大きく影響を受けてきました。

これらの風土、地形、人の営みを、古代から近代までの時代を貫き、加えてそのような条件のもとで育まれた歴史遺産の特徴をあわせてみると、本市の歴史文化の特徴は、(1)マチ、(2)ムラ、(3)ミチという、大きく三つの構造に分類することができます。

ここでいう歴史文化とは、多様な文化財とそれらを生み育んだ自然環境、人的環境、歴史的背景などの総体を指します。その特徴は、市町村に固有の歴史や文化にまつわる地域的な特徴とされ、その地域の独自性やその「らしさ」を示すものです。



川越の歴史文化の構成イメージ図

(1) マチの歴史文化

鎌倉時代の河越氏の居館である河越館跡^{やかたあと}、戦国から江戸時代にかけての川越城とその城下町など、川越には古くから多くの人々が集住した場所が見られます。江戸時代の川越城があった範囲には、明治時代から現在にいたるまで、市庁舎を始めとする役所が置かれ、また旧城下町の蔵造り町家など、今も川越を語るうえで欠かせない多くの歴史遺産がマチに見られます。

市内には、古来より人々が集まる場として機能してきた場所があります。霞ヶ関遺跡には、古代入間郡の役所である郡家^{ぐうけ}があったとされます。その近辺にある河越館跡は、中世に武蔵国内の在庁官人を統括する武蔵国留守所惣検校職を相伝した河越氏の館です。このように、現在の霞ヶ関・名細地区には、多くの人々が住むマチとも呼べる場があったと考えられます。

その後、室町時代に太田道真^{どうしん}・道灌^{どうかん}によって河越城が築かれると、賑わいの中心が現在の本庁地区に移りました。江戸時代には、江戸に近い城下町の一つとして、将軍の信頼の厚い親藩・譜代の大名が川越藩主となりました。江戸時代前期の川越藩主松平信綱は城下町を整備しました。また、城下町の鎮守である氷川神社の祭礼として、江戸の天下祭と呼ばれた山王祭や神田祭の影響を強く受けた川越氷川祭は、華やかな都市祭礼として現在まで引き継がれています。

旧城下町を中心に明治22年（1889）に成立した川越町は、明治時代もなお商業で繁栄しました。その後、同26年（1893）に、川越町の全戸数の3分の1以上を焼失する川越大火が発生し、大きな打撃を受けました。そのような困難にもかかわらず、川越商人は防火建築として蔵造り町家の店舗を次々に建造し、これが現在の蔵造りの街並みとして受け継がれてきました。



河越館跡イメージ図



昭和30年代の鍛冶町通り

(2) ムラの歴史文化

縄文時代から平安時代にかけて、ムラの生活の痕跡が見られます。再び人々の動きが確認できるのは、主に戦国から江戸時代にかけてです。江戸時代、現在の市域には1つの町と92の村があり、ムラの時代といっても過言ではありません。明治時代には、これらの村が合併して川越町や芳野村などが生まれました。これらのムラが、川越の生産や工業を支えました。

現在の本市は、江戸時代の1町92村で構成されています。92の村には、それぞれ特色がありますが、大きく二つの地形上の特徴があります。

川越市域の北から東にかけては、荒川と入間川による沖積低地が広がり、南から西に武蔵野台地や入間台地が広がっています。沖積低地は、入間川・荒川と武蔵野台地に挟まれた水田地帯であり、洪水に苦しみながらも、自然堤防上の微高地に早くからムラが形成されました。一方で、南西の方には武蔵野台地が広がり、土地がやせ、水利が悪く、原野として残されていました。

江戸時代になると、沖積低地の穀倉地帯を守るために、大規模な治水工事が何度も行われました。また、川越城主松平信綱は武蔵野台地の開発を推し進め、さらに柳沢吉保の時代には三富新田が開かれるなど、この原野に多くの村々が生まれ、広大な畑作地帯が形成されました。これらの農地から生まれる産物は、川越藩だけでなく、江戸という大消費地も支えました。

また、地元では、水田地帯を「タバシヨ」「サト」と呼び、畑作地帯を「ノガタ」と呼んでいます。このような生業の違いは、衣食住や年中行事を行う時期の違いなど、生活様式にも大きな影響を与え、それぞれに異なる歴史と民俗を生み出してきました。

明治時代になると、村の名主は戸長こちやうとなり引き続き村を治め、明治22年（1889）に近隣の村が合併し、川越町、芳野村などの町村が生まれました。これらの町村は、昭和30年（1955）に合併し、現在は本市に含まれています。江戸時代の村の枠組みは、その大部分が大字おおあざとして今も残されています。



北田島村絵図



落葉かき

(3) ミチの歴史文化

古代の駅路である東山道武蔵路に面した入間郡家、それを抑えるように設置された河越館跡等、マチとミチとは密接な関係があります。江戸時代の川越街道や新河岸川等は、川越や江戸のようなマチを結ぶとともに、周辺のムラとも密接につながっています。流通や交通の結節点である川越の特徴について、マチとムラのそれぞれが有機的に結ばれるミチの要素は不可欠です。

霞ヶ関遺跡には、古代の入間郡家が存在したと想定され、その近くを東山道武蔵路とうさんどう むさしみちが通っていたとされています。この駅路こそ、山王塚古墳を代表とするような中央の文化が入るミチでした。

鎌倉時代には、川越の西側に鎌倉街道上道かみつみちがありますが、「鎌倉道」と呼ばれた枝道によって川越と鎌倉街道がつながりました。その後、太田道真どうしん・道灌どうかんが長祿元年（1457）河越城と江戸城を築き、北条氏が小田原を本拠として武蔵国を掌握しましたが、いずれも河越城と江戸城を兵站地として重視しており、川越と江戸との交通が頻繁だったと考えられます。



新河岸川早船引札（毛呂山町歴史民俗資料館蔵）

江戸時代、川越と江戸をつないだ川越街道を整備した松平信綱は、同様に川越と江戸を結ぶ新河岸川の舟運を開き、新河岸と呼ばれた新規の河岸場を設置しました。川越街道は中山道の脇往還として栄え、川越城主の参勤交代にも使用されました。物資の集散地として栄えた川越城下町の有力商人たちは、江戸の文化人などと活発に交流し、学

問や文芸を身に着けていきました。

明治28年（1895）川越・国分寺間の川越鉄道を皮切りに、川越電気鉄道、東上鉄道が整備され、昭和15年（1940）には、国鉄川越線も開通しました。一方、明治期に最盛期を迎えた新河岸川舟運は、明治43年（1910）の大水害の後、新河岸川の改修工事が実施されたため、水量が減少、昭和6年（1931）に埼玉県が通船停止令を出したことにより、終焉を迎えました。



烏頭坂（川越街道）